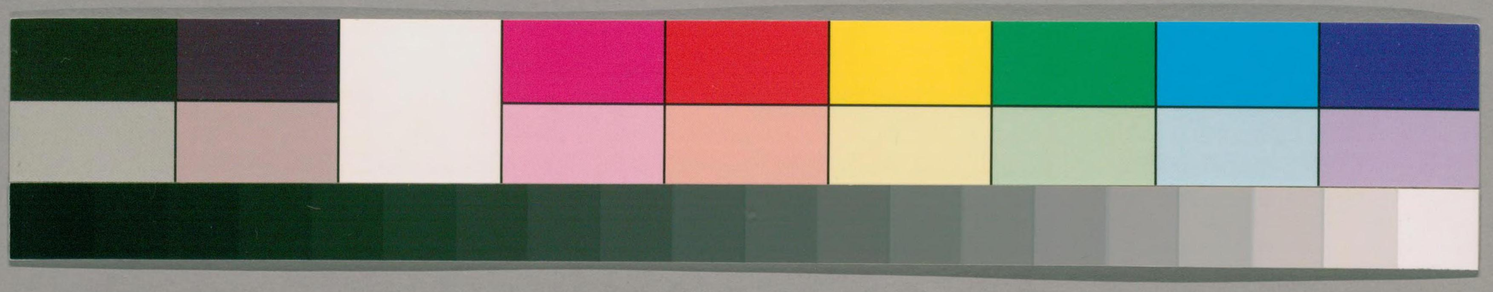


838
12
87

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

家忠日記増補巻之五　自天正元年至同五年

天正元年癸酉

正月小

三日　武田信玄四冬味方ヶ原一戦の後遠州邢部に到越年し今日軍を発し井伊之谷を経て上州郡田に到る　将軍義服使を遣し信玄に謁て云く

大神君及信長と文和ありんとて信玄之に應せ候

十一日　武田信玄三万ヶ原来務を卒して三州野田に城を囲む夏沢利八郎定盈　後に織部正と号ス　此城を守る松平與一郎忠正援兵として菅沼に加て郡田の城に在里

曽山文庫

根岸信輔氏寄贈

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用

其云合て四百余騎武田信玄会勝を以て是を攻撃ッ定盈
君に四囲く守て拒き戦ふの間城湯を信玄謀を且し合盈
して城中の水を堀尽さしむ城云是に屈し檄を飛して後
援を　大神君に請ふ　大神君是を援給ふ為に笠原山に
至て津し給ふと云ふ信長果ると無るに即田と城云ホ
大神君後援ある事を知ると数日渇して困窮するのる
城将夏沢力尽て仗を城外に出して信玄に謂て云く篭
城を諸卒ホ各一命を物らるに於ては定盈忠正彼等り
命に替て城を如くり数せんと謂ふ信玄是を許して定盈
君に城外に出て自殺せんと欲す武田り云是を謀て定盈

君に此を擒ると残る城云等の城を脱ると去る是に依
て野田の城湯を信玄定盈君に此をして山縣三郎三湯
厨に預けしめ二士和郡田に至て信玄二士に尓して云ッ
志を変して信玄に服せば厚く賞せん二士丹心相
沢を信玄使を　大神君に赴しめて謂て云く
大神君捕虜て如く所の作り多崖長縁是等を山家三方の士と云ふ之人
に質を以て定盈君に此と是代へんと謂ふ　大神君
是を諾し給ふ

二月小

十五日　大神君も山家三方の人質に二子軍務に軍

士をして先鋒選しめ給ふ亦菅沼新八郎定盈松平與
一郎忠正に武田り云二千余騎を相副へ廣瀬河上にし
て互に質を代て歸る云々 長篠菅沼伊豆守作手奥平監物入道々文殿岩菅沼刑ア吹浦
神大神君に属して質を出す去年志知変して
武田に使ふ故に其質を以て定盈忠正に易給ふ
十六日 信玄病癖に依て甲州に歸る

三月大

三郎信康師を帥て足助表に御進発あり武節の郷
主私を見て御味方に属す足助を城主於木沢云清厨
は信康を武威に恐れて云攻を待て城を避て逐電ス
平岩七之助親吉に 命で左方を城を攻しめ給ふ等

將久野深正拒く事を訪て城を棄て甲州に走る
石川日向守家成久野三郎左衛門厨家能をして可久鴨の
城を攻しめ給ふ城主出奔す
湯井左衛門厨忠次をして風来寺を城を拔しむ六竺
一之宮を安城攻を待をして降る

四月小

武田信玄卒去沒 五十三歳 男勝頼継て立ツ 信玄卒去を深ク密し病癖と称し
勝頼を軍代と次

六月大

安城に安所に岩を攘へ二役を就て御に復へ 大神君演

去る夏里給ふ異平巻作守貞能同男九八郎信昌後に美作守に
沒ム
大神君に来服也

七月大

十九日　大神君云ふ卒して長篠の城を攻給ふ火箭を
発して二ノ丸を焼しめ給ふ是に依て城中の云君軍粮
焼失也城云本丸に迫り守将詰賀小泉吉田守り拒と云ふ
本多平八郎忠勝榊原小平太康政是を諫るに依て城云
乱屈し力尽るか　異平巻作守貞能男九八郎
信昌　大神君に忠を通せらるの中ゆへ云ふ武田左馬助彼り
逆心の實否を知ん人を為貞能を遣し漸に拒て云く貞能鈴

心かりしを以て多歳の臣道壽齋是を告るの中ゆへ云ふ貞
能凍して云く此所を行て欲問者を以て因を離せの
謀あり貞能に於て全く聊心なし問人に謀言を信じ
て無二の味方ゆへ疑ふ事短重らるの也言ゆへ是して
凍せらるのゆへ左馬助頓に疑ふ敬して却て貞能に懇念
深からしして味方を密計を諸也貞能作りの城に帰て
其夜男九八郎信昌を誓作りの城を退く武田り云元を聞
て撃ゆへ競追ふ石堂金坂り辺に於て貞能色し合せ挑戦
欲救十人を撃揚ゆ武田り云元に俾易して敢て追ふ事なし
貞能云を全して退く貞能兼て　大神君に元ゆへ達して

以前を物し定るに於て　大神君より松平与度物伊忠参
豊浦守康孝男長次郎康重をして貞能信昌を迎し
然れまゝ貞能父子之後瀬山に惹く翌日　大神君の命に
叨て平定七郎親吉内藤金一郎援兵として且つ貞能
り津に於かるか貞能徴努しるに依て之後瀬山を引退て
間援兵の部将来し兵を収て演雲に帰るか

八月小

十一日　武田の兵五千余騎作れて城を進て之後瀬山より
出張して貞能信昌二千余騎を率て再び瀬山に出て海を
辺郷に放火し瀬山に津を僅に柵一重を結ていまゝ屏を
構へて敵競来るかのつり敵利を失て敗走す貞能勝に
家に兵を追ひ撃ッ敵田原坂に辺にして敵且退し合
せて桃鉄に実に於て武田の軍士奥平助四郎を始て又
十余人鉄砲を　大神君より援兵として再び本多康孝
其子康重をして貞能の兵に加しめ給ふ貞能進て作
る表に軍を発す作れて城を敵出張して貞能と戦ッ
貞能大に勝て敵を多く撃揚り鴻田に帰に放火す武
田勝頼貞能信昌り逆宮を怒て信昌り妻として質に
甲府にあるを兵を捕て磔に決

九月大

諸賀小泉吉田長篠ニ城を保つ事を行ひ甲州より是を
勝頼長篠ニ城所に降る事を知りて諸將を遣して
遠州所々に陣を武田道遠軒森の卿に於て本多一平八郎
忠勝桃原小平太康政大須賀五郎左衛門尉康高本多作左
衛門尉重次等と桃鶴に武田の云軍に利を失ひ敗北を穴
山一条の二ヶ所云ふ所に是を救ひ云ふ本多桃原
士卒指揮志ひ軍を速に引取しむ是に以て武田の云
為方なく軍を收て甲州に歸るか
馬場美濃守鳳来寺口に向ふ後也の據渓蓬ふるに依
て大神君是を攻撃事を行ふ故に相葉を御味

方ニ陣中に積て火を放り是を燒りしめ詐て云ふ行ひ
退き御云を設けて敵を行しめ給ふ敵果して軍舍を燒
て敗し去るに察して武は又猶ほ三藩池来るか干
時御味方ニ伏云卒に起るか敵驚き騒ぎ退散を
異平信昌に命して長篠ニ城を守りしめ大神君ニ御
女を以て信昌に嫁せしめ給ふ所に武田勝頼二州を侵
まんと欲せらるゝ云ふ其利なし鳳来寺急ぎ一
撥を催せ一撥の賊徒ホ是に惑して武田の云を鳳来寺口
より國中に引入ん事を植村大作守泰忠 初メ鳳来寺ニ別當安養院ト号ス
鳳来寺表案内有るに以て此を以て大神君に

達せ　大神君本多三弥三浦九兵衛厨久貝市太夫厨後
尾又左衛厨渡辺半兵衛厨を召て　命ありて曰風秉寺ハ
敵境に近し一揆之賊徒ハ敵地に脱走せらるゝのやうに
見る諸々搦捕へきの由御分を奉て彼地に発向せ渡辺半
兵衛厨同姓墨太衛門厨兄弟賊徒の長者人を擒し先を
携へて濱雲に帰る　大神君渡辺兄弟り速かに切城
奏せらる
武田勝頼師を帥て遠州表に出張し進て見付に府に
至り二俣乾高明天方多々羅城への制法を定め近辺
を巡視して帰路に赴く此頃に遠州諏訪之衆に一城を
築く武田左馬助馬場美濃守兄を監せ
此年　大神君信康に命して足助伏地等之城を攻撃
たし給ふ

天正二年甲戌
正月大
一日諸士遠州濱雲之城に登て　大神君に謁して新正
を祝せ　二日　夜大例に加へ濱松之城に於て御
諸物安里諸士を賀せ
又日　大神君正又位下に叙し給ふ

二月小

八日　大神君ニ男子誕生故ナリテ本多作左衛門重次ヲ
弟ニ養ヒ云フ奉ル　成長ニ後下野国結城左衛門佐晴朝男
子ナリ仍テ解ヒテ結城ニ弟ヲ継シ也
是日信ヲ結城秀康樣中納
言徳ニ信ヲ号シ給ふ

十二日　武田勝頼又ケ国ニ云ハ卒シテ信長ニ於濃州表ニ
軍ヲ発シテ先ヲ信長ニ東美濃岩村ニ城ヲ攻ル也
秋山伯耆守座光寺ニ二百五十騎ニ書云ヲシテ是ヲ
守ラシ信長秋山ニ和せんと請ふ云ヲ秋山聴ク次是ニ信ヲ
信長岩村近ニ墨ヲ擁ル事十八ケ所軍士ヲシテ守ラシ
め秋山ヲ拒ク

十八日　織田信長参議ニ任シ従二位ニ叙ス先ヲ是ヲ先ヲ
正四位弾正忠

四月大

六日　大神君大井ニ出ヲ攻給ふ後ニ云ハ廟路ニ発シ
瑞雲ニ陣シ給ふ諸卒ハ龍毛城ニ内和田ニ谷ニ比ニ救
日連雨ニシテ士卒粮米ヲ闕ク是ニ信ヲ　大神君云ヲ
門ニ御倉ニ帰リ給ふ大久保七郎右衛門尉忠世小野惣云
兼厨忠重殿ヲ于時大井ニ城ヲ大野宮内左衛門厨路ヲ
蹴ク追撃ツ御味方ニ云ハ小右郎鶴殿放ス郎大久保
勘七郎小原金内等二十余人戦死ヲ小野忠重大久保

忠世林原康政等馳返して奮戦ひ首数十級を得て敵を
退ひ退く御倉要害の地に非ず先に信ぞ　大神君云ふ
収て天方に入り給ふ
十四日　武田勝頼二月中旬より此月に到て法則に数城
を陥し武威を震ひ進て明知に城を攻るに時信長安
勝を卒して明知の城に後援す山縣三郎兵衛尉六千余
猶ほ云ふ卒し信長り先途を塞て霧田山に出るか信
長兄を聞て退き去るか先に信ぞ勝頼明知及ひ飯柿の
友城を安く援て云ふ収て甲州に帰るか
五月小

廿七日　武田勝頼高天神に城を圍て攻撃ッ城主小笠
原與八郎ハ其先き今川家に臣たりて三十頃年
大神君に麾下に属して此城を守るか故に後別に先方
岡部丹波守同姓次郎左衛門尉等ハ小笠原に連年に交り
互に其別臆を取て詞を合せ勇ゆ震て挑戦ハ小笠原
仗を演出に他て援云を　大神君に請ふ　大神君先
を送し給ひて高天神御を発を催さるか
六月小
十日　大神君高天神に城云を援給んか為メ師ヲ帥て演
出て城を御を発あるを

十七日　大神君使を岐阜に発して高天神に援兵を請給
信長兄を送て勝頼り生を離れて遠く高天神まで
出張すなり事兄弟に所に幸也高天神の城に木兄を舎尺
して武田の兵を謀り毎は信長速に発向して　大神君に
勢を并て勝頼を撃人事掌を指り加しと信長頻に
もの勢に催す　織田信長高天神の城後援として
二万余騎の兵を率て岐阜に城を発す
勝頼高天神に城を攻る事左々急なり聴きてこそ城に
能く守て敢て破れず勝頼小笠原を誘て地を割て招
兄に依て小笠原君を変して勝頼に降て高天神の

城を避渡して冨士に下方に退く
織田信長高天神に城後援として二別吉田に到り進て今
切れの渡りに着く干時小笠原與八郎力戻て敵に降る
と云へて高天神に発向するに及ぶ云々吉田に帰り
大神君に来會して信長謝して云く備頼屡逃出に
張すなりと云へ　大神君に民威に叱て我心を勞すなり
事なく漸天下を平らぬ云て互に治国の制法を論せられ
信長帰路に赴く干時去年より遠三友国稲麥不作
なるの事信長　大神君に黄金二袋を進せらるか　革二袋に金て
二人して兄を捧て出
廿一日　勝頼高天神の城を渡す城東

郡を從へ云々收て甲州より歸る
肯信長岐阜に歸りて入る

八月小

二日　大神君遠州馬伏塚に四里を築かし夫大須賀又
高木先厨康高をして先を守らしめ給ひ小笠原與八
郎の四郎を康高に賜る

九月大

七日　武田勝頼二万余衆を率して濱松に城を繫んと
窺ひ天竜川辺に屯ス　大神君濱松より軍を発し
給ふ其兵七千余衆津を分ツ事九例として小天龍の
岸に陣し給ふ勝頼の兵天竜川の中に瀬を渡て進ミ来る
河井左兵厨忠次の陳言に依て　大神君兵を濱松に城
に收給ふ勝頼も亦天竜川に津を退て二俣に赴き井伊
の谷に至て平山越を經て信州伊奈に惹く勝頼の祖
父信虎此所に来會ス　干時信虎八十一歳
武田信玄卒去するの事深く先を密するの人を遣ふ
推察して先を最ふ北条氏政其實否を知んかるに板部
岡江雪齋に面て夜法燈明りならるるに以て江雪齋
遊遠軒を信玄と見誤る江雪齋小田原に歸て信玄
故命に申候氏政に告る所也と云々去年異年冬

大神君の麾下に属し信長卒するの事を　大神君に
告るに如く遠三両国にして信長の死偏く元を知る
勝頼墨を二州風来寺に築て甲州に会議して元を守
しむ酒井丸忠門厨君次　大神君の命を奉て会を風
来寺に発て敵の城下角屋村に放火せ城云山にて元を拒ッ
忠次戦大に勝て敵を数多撃捕る

天正三年乙亥

正月大

一日　群臣遠州濱松に城に参て　大神君に謁し新正之
賀儀を献せ　二日　夜に入例に如く濱松の城に
於て御謡物あり諸士参賀之

二月小

十五日　大神君濱松に城下に御放鷹あり干時路辺に
して　大神君井伊萬千代（干時十五歳後に云部少輔直政ト号す）を尺給ひ
誰かなの童子なるのゆゑ問せ給ふ井伊信濃守直光
の孫肥後守直親の好きに如く御城下に勢去するの
旨御達せ　台聴難ましまし日万千代を城に召て麾
下に属せ井伊に谷は先祖歴代に回領するに依て万
千代に賜て井伊に谷に二人元好ひ兵力に士を附ふ

又木俣清左衛門守勝様原次太衛門西郷茂左衛門
厨をして万千代に附しめ給ふ
十八日 前夜天野三郎左衛門（云弥）厨康京り下女連歌に発句を
夢かな吉兆にかなるにかく康京今朝 大神君に披露を今
月廿日 御猩に賀儀あり 此日連歌に達者を召て彼に
発句をして百韻に連歌をかなしめ給ふ
此月に菱長篠に軍に 大神君大に利を得給て武田り
瓜牙に信成多ク撃捕し欠給ふ先より嘉例として正月
廿日に連歌の會を催さしめ給ふ
四月大

五日 勝頼公を卒して遠州平山を経て二州宮利に至れ
大神君に奴僕大賀源四郎と云者あり早賜に者なりと
云天旧功譜代の者なり信て奥郡二十年郡に代官職し
なる後家家子孫繁栄して君恩厚きの所に不成に
して野心を企し金地平左衛門山田八藏小谷太衛門
と無して武田勝頼に志を通し二州岡崎の城に甲
州に云ふ御ひを入れんと謀る勝頼大に悦て其物を定メ
所に云を岡崎に発んとも二十時山田八藏志を変して
竊に此企を三郎信康に告る信に信康大賀源四郎を
謀り先を召て生捕しめ給ふ金地平左衛門厨に隠謀露顕

する事を察して戦ひ死んと思ひ出る岡崎の云士木池
集て兄を救ひ其首を濱雲に離せ小谷甚太夫厨ハ
遠州に國殿にして服部半藏兄を擒せんと欲せ天竜河
を潜て渉て二俣に城に免ひ遣り被ひ亦甲州に走れ
野心にて本人大賀治四郎ッして兄を傳して旌をさしめ
其罪と彼ひ遣り姓名を兄に書て遠三安國を引渡して
岡崎の町口に辻に生なり姓土中に埋て竹鋸を作て兄を
截しむ七日にして遂に死せ大賀り妻其子四人を捕て
三州念志原に磔せ
廿一日　勝頼長篠に城を圍む奥原信昌援兵松平外記
伊昌拒き守るか
五月小
六日　勝頼兵を分けて火を二連木牛久保に放せ
卅日　大神君吉田に陣し給ふ信康山中に法藏寺に屯
給ひ勝頼り先鋒と吉田の城外に戦しめ給ふ戸田左
門大津土左衛門厨捨を合せ成勇ひ震ふ
七日　酒井左衛門厨忠次吉田に城外に於て小縣三郎兵
米厨と同を合せ高鍋に勝頼り兵敗走せ
十日　大神君小藥大六をして彼岸に起しめ長篠の城
後援に兵御乞ひ給ふ信長兵を送せ

十一日　勝頼り云長篠之城渡合南門を攻む城云能く見を
拒くにゆゑ武田り云退く　十二日　長篠之城渡
接として信長彼岸を発す此日勝頼り云長篠之城瓢丸
を攻む信昌士卒を指揮して矢鉄発し火炮を発して
見を拒りしむ暫時にして寄りまゝ云疵を受り命を殞
者百余人なり見ゆゑ武田り云利を失て退く
十四日　長篠城中に粮渇に守云飢渇に見に信ゑ
信昌に忠に接云を請人なり夜に入り鳥居強太郎を
して竊に長篠城を出す　十五日　鳥居図書に
到十日信長図書に着く鳥居信長に謁し城中に形勢

を語り接に紙書に信長許諾に　廿日　信長牛久保に
到り軍勢進て池せかく凡五万余騎に存
十六日　夜半鳥居長篠之城帰り来て武田り陣の柵を
破て城中に金人を殺す敵元を悟く鳥居を擒にて勝頼
鳥居に謂て云く汝城辺に到り相知るゝ者を呼て　大神君
なひ信長長篠之城を救ふ事を行はしと云へし然るに城云
困勞して兄弟に降るゝ鳥居元を詐り謀て故に獲
頼云をして元を護せしめ城辺に歩せ寄せ鳥居物を
変して大に呼て云く　大神君信長近日後援として城
に御発向あり天運開かる事三日を過へからに強く城を守

あつきの中に告るか城を見を聞くに勝頼想く多居
を傑に注　十七日　信長野田に取り
十八日　信長進て設業し卿極業守山に陣す信昌信忠
御堂山に屯注　大神君八劔ゟ行山に陣し給ふ勝頼云
を分て長篠に城を拒さとして小山田彼中守等二千余騎
をして守らしむ書て栄て城は甲田云庫院三枝松勘解
由左衛門尉其外諸浪人名和六種ゟ物又味與惣云藩尉飯
尾治四太衛門尉ホを遂長として是に加へしめ云二千余騎を
して城を守らしむ
十九日　滝井左衛門尉忠次竊に　大神君に達して云く

云を卒て注道を見てし欲不完に起事を舊の栄山に城を
攻破て出陣し城寄しかく陣營に放火し其外に余て
勝頼の後軍を襲ひ攻ハ敵振損して必敗せへし
大神君見を許し給て忠次をして見を信長に告け
しめ給ふ君次信長の陣に住て此諸を論て信長想て云り
海の諒大に為也忠次赤面して敗に退くと雖も二ツ時信長
君次を用所に招て謂て云く海の諒最も善し此計略
他聞に満る事を恐ずして我偽て海を怒る君次見を聞
て悦ひ検使を信長に請ふ信長諾して青木彩七郎加
成市左衛門尉金和六郎八佐藤六左衛門尉を以て見に副に

大神君の命を奉て松平主殿助伊忠其子亦八郎家忠（後に主殿介と号す）
本多豊後守康孝其子彦次郎康重（後に豊後守と号す）松平
左近将監忠次（後に周防守康親と改む）牧野新次郎康成（後に右馬允と号す）菅沼
新八郎定盈（後に織部正と号す）松平玄蕃允清宗西郷孫九郎家
員（後に弾正左衛門と号す）并酒井忠次に加りて其勢并て二千余騎
大雨を侵して河を渉り南山を経て明る暁天に鳶之巣
山に至れ共甚嶮難なるによりて奥平監物並ひ名藏
彦八郎をして嚮導とし次
廿一日黎明勝頼一万余騎の兵を率して瀧沢川を渉
て二十余町山を張し陣を分ち軍を三隊として

大神君並ひ信長の陣に向ふ
信長ノ陣瀧川左近将監一益木下藤吉郎秀吉丹羽
五郎左衛門尉長秀を始く先隊とし甲州の兵は馬上の
達者なるに依て柵を結ひ事二重鉄炮三千挺を撰ひ
集て佐々内藏助成政前田又左衛門尉利家福富平左衛門
尉塙九郎左衛門尉野々村三十郎ホを以て隊長として敵
馬を延く時に陣に駆入て欲い鉄炮三千挺をして其
千挺を以て先を試すへしと其令を定む　大神君
並ひ信長の軍勝頼か陣に備へていまた戦はさる
處に武田ノ陣より使して軍士三騎池

大神君の云円岐甚五左衛門善教同姓治次太衛門らを
以て元を対する其間遠して中らも無ることを歟此ら勝
る恐て北へ去る大久保治右衛門尉忠世甚見て七郎右衛
門尉忠世に謂て云く今日の軍尾州に云は拉急也二州
に云は主義として尾州に云は先をせられ當手の取
厚しるべしと謂して　大神君の賞無限伺ふ
大神君元を許し給ふ日下部云右衛門成瀬吉右衛
門尉を以て隊長となさしめ祈ふ諸卒の中より諸砲の
達者を撰び出して歩云として大久保治右衛門忠
佐に相副らる忠佐先鋒に進む

成瀬吉右衛門尉ハ先年故有て二州を退き甲州に往て
信玄に属せらる事年あり其後再び二州に帰来ル
大神君に奉仕せ是に信ぞ成瀬武田家に部将なり旗指
物元を分明に見知る無るに信ぞ今度て軍に成瀬を
使者として先鋒に加へしめ給ふ
大久保忠佐十二年を指揮して武田ヶ津に大砲を放さしむ
武田ヶ云元に擬議せと進ミ来り廣瀬江右衛門小菅五郎
云清尉二科傳右衛門尉等能戦て疵を蒙て退く大
久保七郎右衛門忠世渡辺半十郎先鋒に至て敵を攻
撃ッ山縣三郎云来尉甚云三子来猜を卒して進ミ

来て信長に云作久間大清門尉信盛と相戦ふて柵より
中に作久間り云ひ退ひ今か干時　大神君の津より先を
救て姫卒を進め頻りに鉄砲を放ましむ山縣三郎云清尉
り軍勢五十人先に中て死亡に清云作久間り津に敗し
かゝか信長又姫卒をして先を討ましむ山縣り云根狽
して離散せ此に於て山縣り鞍の前輪に鉄炮中て即
死せ武田道遠軒り云ひ又敗走に小幡上総介先に入
替かか　大神君に臣石川伯耆守教正池せ合て先て戦
大久保忠世其弟忠作内藏に左衛尉信盛に敵を謀て
會尺し門近く池奇せ一同に鉄砲を放ましむ部敗北に

武田左馬助進て奮戦ふ云ひ敗云敵事を以て利を
失て退く馬場美濃守真田兄弟伍を放て次云を整へ
進に来かか滝川左近將監一益作久間右衛尉信盛姫
卒を指揮して二十挺に火炮を放ましむ　大神君に御津
より岡を発して攻撃り馬場先に擬議せと勇に進む
干時　大神君に臣石川伯耆守教正本多平八郎忠勝
馬居彦右衛尉元忠大久保七郎右衛門尉忠世平岩七之
助親吉等勇猛震ひ術を見して刀戦に馬場り軍勢
先に辟易して進す次後津敗して敗せんとす干時作
作内藏助御敗信長に謂て云く敵に津敗に敗亡て亀

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用

萬死を以て戦場を脱す去るか前夜鳶崇山に起く深井
た兵門尉忠次松平主殿助伊忠男又八郎家忠本多豊
後守廣孝男喜二郎康重松平左衛門宗次菅沼
新八郎定盈西郷孫九郎家員牧野新次郎康成松
平丟蕃允清家今家六郎八迫長吉木新七郎加藤勇
清門尉佐藤六左衛門尉等軍を不意に発して鳶崇
山に敵を攻む勝利に云武田云庫段信實二枝松勘解
由左衛門尉飯尾淡四左衛門尉五味與惣云兵尉名和彦
之助先を守るかと云一左拒く事を以て酒井左衛門尉
忠次松平主殿助伊忠と謂して敵に後陣に火を放て

囲を発し敵離散して伍を乱す干時長篠の城云間を
囲て進て山に前浮を攻撃ッ敵悉く敗亡して部将武
田云庫段信實二枝松勘解由左衛門尉及び名和彦
助等武田に云多戦死を又長篠の城の拒き小山田俊
中守諸賀入道相木市云清尉木已り陣営に火を放て退
く御味方に城云利に余して先を追ひ撃ッ
三州深溝に城主松平主殿助伊忠軍以前に其子亦八
郎家忠（後に主殿助と号し）を招て云く吾今夜此に先登し
力を尽し戦を変人に縦ひ武田に云多勝と云た豈一
方越破れて云事あらんや然りと云た敵多勢なりと吾

此に戦死を遂んと欲し海を身を全して　大神君に
奉仕し家名を継て忠義を励すべしと謂て其の負ふ
所之矢家の庶毛を切て希として此元の盃を以て干時
亦八命家忠父伊忠と共に死んと欲して陣を去るを
伊忠怒て云く汝今宴に死ハ其志ニ男に似たりと云ふ
父子ハ命を殞して家を断ッハ孝に非ず命を全して
君に奉仕するなれ兄忠也汝今伊忠と共に戦死すハ
君孝に非ずと伊忠言を尽ハ家忠其理に服ハ干時
伊忠悦て士卒を分て家忠に付け父子相別て伊忠
進て武田か多勢に退くを追て宮城の渡りを越て兄を

遮り留て挑戦ハ事数刻武田か云利を失て離散し伊忠
勝に乗して兄を追撃ッ干時小山田海中守五百余騎を
率て後ゆ且て伊忠を圍む伊忠擬戦せし兄と戦
云ふ敵の多勢圍攻む事たゝこと思也伊忠ニ男ハ奮ひ
術を尽して圍中にして遂に戦死ハ干時二十九歳使
云ふに戦死ハ人皆其ニ男ハ義称ハ
長篠の戦今朝卯の刻に始て其夕部未ニ刻に終ル
大神君及び信長友将ニ云士等ニ於ケ洋ノ事凡一万
余級其中武田ノ精ニ山縣二命云清厨馬場義清守横
田海中守内藤修理亮大原大夫厨横田十命云清厨

真田源左衛門尉弟真田兵部少輔甘利藤蔵原集人
正安中左近衛大夫望月甚八郎城伊養小幡弟兵衛尉異津
十郎兵衛尉等他異津十郎兵衛尉ハ　大神君の兵高力
與左衛門尉正長光を撃ツ多田淡路守り子多田三八郎
ハ　大神君の陣に擒に沒多田其淡を寵て脱走去ら
人を殺して光を追撃て遂に敗沒
織田信忠長篠を城に今く城主異平九八郎信昌を招て
籠城に拒守を感禰し其臣拔掌に戦功を靡せ又信
長西尾小左衛門尉をして信昌り二男敢を奏作せ
大神君信昌及ひ其一族七人家臣五人を召て各軍功を

奏し給ひ長篠田嶽吉良田原遠州之内刑部吉比新庄
山梨高辺等之食邑を信昌に賜り又御腰物大盤君と長光を
賜ふ　信長　大神君之臣源井左衛門忠次を
招て舊業に戦功を賞して薙刀を授く年カリて後大神君忠次り宅に渡御
あるゝ時此薙刀を忠次大神君に敗せ
田り兵士に首化を掘く掘り光を埋め其上に塚を築て信吉塚
と号ス今年に至て信吉卒去を密ふに依て斯名く
十六日　信長　大神君に面して云く長篠に我に大に獲
て武田り爪牙の臣等を悉く死亡ス此幣に余して軍列
及ひ信州に沒今ふに於ては武田り一族を悉く追撃て

甲信安國を浮ん事掌を指りことし無りと云へ吾等苦
戰して疲勞次暫く人馬に勞を休メ其錢切を賞して
後殿を軍を清州岩村に出し秋山伯耆守を誅伐して
甲信に攻入なへし　大神君も遠州三州安國を云ふ
発して甲信に進発力人々の為ゆ誅して信長云を收く
岐阜に帰る

六月小

二日　大神君軍を發州由井藏沢に出し狩ひ遠州二俣
に御進発あり昆沙門堂鳥羽山和田の湾嶮原に出ゆ
揃へ二俣に備へ二俣の城を攻狩ひ城云を張して小川を
滿て戰を挑む朝比奈泰云清厨先鋒に至て御味方
の魁云松平彦九郎を撃捕ル内藤泰次太郎厨長
九郎と縁者なるに信て進て朝比奈泰云来厨を射
倒し其仇を執て泰云清厨り弟朝比奈泰藏兄と首
を内藤に掛らせしと進む内藤二ゝ矢を放て泰藏ゆ
対敵を城云内藤を撃んと競ひ発て内藤退く兄に出て
朝比奈兄弟り首を浮せ歌部外に火を放て城中に
敗し今か実に疵を蒙るの城云一人を助て城に引入へ
歌るゆ者あり櫻井店の勝次兄を城門に追ひ張遂に
歌を撃て首級を得り勝次り指物赤根城門に至り留

多紀者ニ沿退く勝次り奴僕（其名を今若しいふ）先を勝次に告ゆ勝
次再び馳せ歸ひて先を取ゆ　大神義鳥羽山に御津坐
かりて勝次り武勇に働ゆ紀見給ふ勝次即撃捕ゆ家の
兵紀持て義山に來て　大神義の台賢に今ゆ其功
を賞せられ遠州神岡村敷地村高木村を勝次に賜ゆ
翌朝二俣に城を信田太藏作信蕃昨日内藤源次太郎門
厨り討ゆ所に先を以て　大神義の臣石川日向守家成
り降に送ゆ其先に札を附て大に先を義祢を
大神義内藤源次太郎厨り弓勢昨日に軍功を應せられ
御胴服を内藤に賜ゆ。

大神義猿楽等を召れて蜷原に於て猿楽あるて云
辛のんを和慰し給ふ大保七郎太藏厨忠世をして
二俣の城を圍しめ給ひ　大神義師を帥て諏訪原の
城に赴ひ給ふ勝頼朝比奈立左郎をして光明の城を
守しむ此城溢路十余町かりて其要害険し　大神義
云紀辛して先を攻給ふ本多忠勝桃原庫政先鋒に
進ゆ二王門に攻登て奮戦に城將朝比奈拒ゆ事を得ず
遂に降て城を避け落ぬ
昔信忠正五位下に叙次
七月大

廿日 大神君出馬ありて遠州諏訪原の城を圍ましめ給ふ
守將今福丹波守諸賀小泉堅く守りて防き戰ふに鳥居
彦右衛門元忠此城の案内者として先陣にすゝみ戰ふ
城中より鐵炮を放ッ元忠か股にあたる從士杉浦藤八郎背に
負て陣所に退く

八月小

廿二日 未明より出て諏訪原の城を圍み攻む 諸賀小泉
保等是を防ぎ力つき逃て諏訪原の城を捨て遁る小山の城へ
退く 大神君命有て同諏訪原の城は高天神と通路として
田中と大井川を隔て東牧野里常に田中の兵と晨戰し

此時あらためて名付給ふ 此城の守を命給ふ 諸將に問給ふに
答ふる者なし 于時松平左近將監忠次進みて請て此
城を守らんことを乞ふ 遂に 大神君大に御感悦ありて忠次
に御諱の字を賜ひ康親と號し後左近將監康親と名乘 周防
守に任し給ふ 諸將に諏訪原の城を改て牧野の城と
号し給ふ 以謂く周の武王殷の紂を牧野に敗る周は八百周の世の名也名金相同し 康親か武勇は奇とし
給ふ是より信任として遠州榛木河尻七百貫の地を
周防守康親に賜ふ 是年より天正十年三月に至て七年の間康親牧野の城に在て是を守る
亦牧野右馬允康成 命を蒙りて康親と共に牧野の
城を築衛す 大神君累世の部將等二人援兵として是

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

牧野の城に来り加へ康親と共に城を守るか
此月源井左衛門尉忠次好い異平九八郎信昌　大神君
之御使として波阜に到る信長二人之二男敢を義称し
自今以後九八郎り名称呼て武者に物と云へし干時
刀一文字暑衣を仰て信昌に授く
大神君源治郎好い先明の夜城を湯を給ひて後を
小山之城を攻撃ん諸将を云て先を称し給ふ干時
源井左衛門尉忠次上言て云く備を設け長津とは士卒
疲るへし願くは軍を収て暫く其労を休メ給へと諫メ
奉る又松平周治守康親進て云く小山之城を攻ら

まんは先善き謀なるへし其敢ハ先日長篠の軍に武
田り股旅の臣皆戦死後勝頼独武しと云た二男云なく
して何ぞ以て小山の城を救んや　大神君先を許し
給ひて則云御発して小山之城を圍まし先給ふ石川伯耆
牧正松平周治守康親先隊として攻撃ッ松平善四郎康
安先鋒に奮戦に本多平八郎忠勝士卒を指揮して戦
りしむ忠勝後卒中村無想内山忠三郎小野田無四郎
捨を合せ日益三蔵弓を仰て猛撃し敵を付るか小泉源
八郎松下七兵衛尉土屋甚物小戦死次旅宴松平又八郎
家忠後に主度物と号候先鋒に進て戦て首級を得る事

九月大

十六日　武田勝頼二万余騎にて遠州を発て小山の城後援として大井川を渡りて出張　十七日　勝頼陣を大井川の辺に張る之甚急なり　大神君先鋒聞給ひて前に出城あり後に大敵あり遠州兵を退に至んと軍の諸将に議て諸卒に命して小山の城の囲を解し牧の原に備て列を御して退きたまふ　榊原康政大須賀康高を先駆として諸隊殿に備を設け敵を大井川を濠として陣す（本ノママ）丈軍して退く高力与次郎正長（後に土佐守と号す）日下部五郎八返し合せ敵と戦ひて首級を得たり

大神君は信康に後殿を譲り給ふ信康遂に殿後し給ふ
大神君遠江掛川の城に入り給ふ

十八日　勝頼遠州を発して小山の城に入る　大神君進て陣を馬伏塚に張り給ふ　勝頼軍を引て甲州に帰る　是に先て大神君浜松に御凱旋ありし　濃州遠山の城は勝頼秋山伯耆守をして座光寺をそへて二千余騎をして是を守らしむ　岩村城を信忠公包囲して攻撃す城兵堅く守りて是に拒く　勝頼後援として伊奈口より出張せんとするに長篠の軍に爪牙の部将多く戦死して諸士は皆長篠の軍に利を失ひ織田の武威に恐懼し

て進む事を以て救日を経るの間に遠山の城中に粮
尽困窮に気に依て城云刀尽て遂に信忠に降て遠山
の城を避け渡て信忠遠山の城を降て城将秋山産光
寺を捨て渡り牟に也次信長秋山に憤深るに依て彼
も此礫にて奥平九八郎信昌り妻質として甲州に在
之此勝敗気を礫に次其仇を報んり為メ且ツ秋山り妻は
信長伯母なるを岩村に某に死して後嗣子なれに依て信
長末子（御房丸と号ス）を以て岩村り養子として其名を継
しむ気に依て御房丸遠山の城にあり岩村り後家
秋山伯耆守と嫁して御房丸をして甲州に也して

信長の質と次故に信長気を怒て秋山り妻を救に
遠山の城粮尽き城云仇に及ぶの時為方なく財宝を以て前
対面の城に賣て粮を資用と次小野下野守信元気城
買て其價を送るが依久間右衛門信盛ハ信元と不快
也気に依て依久間小野を信長に譲して云く遠山の城
粮尽き城云困窮に及ぶの時小野信元志相通し対面の
城にも霧に粮を遠山の城中に送て城云を救ふの由を
伝ふ信長大に怒て使を対面の城に也し信元り野心を
實否に糺次信元驚て其誤り糺を述て信長の疑心を
散ん為に信元り臣一人をして信長の使に副へて也しむ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

彼也等途中にして深宴沉酔して暮るに及ひ両使共に
戦ひ永次先に信長に信長深水野り逆意を定る
廿月信長入洛して柴大納言に任次（中納言を経次）大和藤大将
を兼任信長秋田城之命に任せ

十二月大

廿三日　二保之城を信田右衛門佐信蕃城を堅く守るか
とも云ふ後援之兵力紀に助て大久保忠世相賀て和を乞
遂に二保之城を去て甲州に帰ル時信蕃り第信田
善九郎同源八郎を質に献次　大神君を質を信
蕃に無ふ彼質を二保門にして互に返さしめ信蕃高
天神に返す　大神君大久保七郎右衛門尉忠世安信四郎
九郎忠政に命して二保の城を守らしめ給ふ（今年天正三年より同九年に
至て二保之城を守るか）

廿七日　信長　大神君を誘して水野信元
を誅せんと欲す　大神君久松佐渡守俊勝をして信元を
迎へし先給ふ俊勝甚所謂を知らず信元を迎ふ信元罷
侍に至るか　大神君平岩七郎親吉に命して岡崎
之城下相兼幸にして遂に信元を救はしめ給ふ俊勝元
を恨て　大神君と依猶を信長水野信元り四郎を
以て讒臣使人間右衛門尉信蕃に賜ふ

天正四年丙子

正月大

朔日 例之如く御寝の頃儀あり 諸士演習之城に參賀次
又今日連歌之御會あり 去年天正三年より今日之連歌
之會は始て催さるゝ先より例として
毎年此式あり

二月小

七日 上杉謙信 輝虎入道本氏長尾上杉家を継く故に上杉と称次 書は酒井左衛門
尉忠次に投して 大神君と謙信共に勝利を夾て
先ず攻人事を告らる
大神君遠州横須賀に城を築かし給ひ大須賀五郎左衛
門尉康高 筧助実をして先を守らしめ給ふ 大神君師
を大井に発し 樽山に城を拔給ひ勝坂に城を攻撃しめ給ふ
天野宮内左衛門 塩見坂に陣に據て先を拒く御味方
之先鋒 聊利を失て離散次 大原大助 大須平左衛
門尉等命を殞す 山野惣兵衛 尉忠重苦戦して 敵を
追返次 大久保忠世に 命して石嶺に登らし給ひ先を攻
ましむ大御是を守るに堪次退て康晃之城に壁ス
此地溢沮にして士卒を勞するに忍ぬ故に 演習に
遂ひ給ふ

三月大

十七日　大神君松平甚太郎家忠松平周防守康親子
連書を賜り采地を家行分
一今度氏忠義獲府入国牧事處ニ外相添依ヤ付獲
別山東知行半ハ家行事ニ所国政等ニ係ニ甚方
ヤ付ニ不動事
一山東ニ偏ニ山西知行半ハ出ル事
一對氏忠諸篇異見聊不ニ令疎畧事
一在先ニ之策企逆心ニ之由治ヤ妨礼明憲法可加
下知事
一從弟他所忠義ハ暫退ヤ甚方ニ不敢甚ニ同
ハ事ニ申付事
右ニ條ニ令願掌ニ年自今以後競望人治ニ之一切
不ニ許容ニ永不遠ヤリ分ナル也
右四四子年
二月十七日　家康
松平甚太郎
同　周防守殿
六月小
六日　從井雅楽頭ニ親卒次ニ親病前危急ナリの時
大神君彼ヲ疾病ニ訪ひ給ひ二親ヲ宅ニ渡御あり

御手かり御案紙賜く思ふ事あるかに於ては聊も憚なく
所なく遺言すへ紀の旨　勅命を蒙るか両親其御懇情
之厚事を謝して両親り嬌子與四郎　後河内守重忠と号江兄雅正江右世り
父也　次男與十郎　後彼後守忠利と号江兄讃岐守右衛り父也　と　大神君の御前に
呼出して両親言て云く我思ふ事他なし此二子君に
御哀憐を請て忠義を尽し其器に依て奉仕せん、
事を報ふ　大神君兄を諭し給ふ平岩七之助親吉
をして両親り病中に付て重かし給はれ候て量御あり、
其後近臣等紙ゆへ屢彼の病いを問せ給ふ

八月大

織田信忠従四位上に叙ス
此秋三郎信康三州大濱之卿主長田平太清門厨重
元り男傳八郎恵勝を召て始て御家へに属ス傳八郎
後ニ長田を永井に改
右近太夫と号ス

十一月小

織田信長入洛し二条の妙覚寺に居るか
十三日　信長三位に叙ス同ナ一日内大臣に任し津の座
宣下同ナ三日参　内
此年武田勝頼遠州金谷峯之城に出張ス　大神君
十月　大ゐい中山に津し給ふ勝頼岑の城を退く

天正五年丁丑

正月大

一日 遠州濱松之城正旦之頒例之如し 此春 織田信忠

入洛し 正四位下に叙次

七月小

十日 松平與一郎忠正卒去次 三十四歳 嗣子なし 信之弟

松平與次郎忠吉忠正り家督繼く 忠正り家ハ大神君御同胞之御妹也

大神君之命に信之忠正死して後弟の與次郎忠

吉に嫁せし 此給ふ 忠吉卒して後此家を給ふ 又保科源正に嫁せしめ給ふ

此秋 大神君遠州山梨に御出発あり 穴山梅雪乞

を拒ゝ 意御味方之軍士競ひ撃ツ之間 梅雪遂に利を

失ひ退く

十月小

勝頼公 遠州に出次

十日 勝頼小山之城より大井川邊に出張して 合戦し

て歸る

此日 大神君馬伏塚に陣し給ふ

信康濱松に來り給ふ

十一日 三郎信康勝頼り合戦引く歸る を図給て 図

得に歸給ふ

十二日 大神君馬伏塚より濱

松之城に至り給ふ 十日より濱松の城経始

背嶽田信忠入洛し従二位に叙し左中将に任次
廿四日　大神君読将を演松の城にて義膳を賜ル
松平主殿物部忠城に登て列座次
背嶽田信長右大臣に任し従二位に叙せ大将えの
如く
背植村出羽守家政卒去次
十二月大
三日　嶽田信長三列吉良に狩次　大神君三列の
士に命して先を饗し給ふ
十日　大神君従四位下に叙し給ふ
廿九日　大神君左近衛権少将に任し給ふ

家忠日記追加巻之六　自天正六年至同九年

天正六年戊寅

正月大

十六日　大神君正州圖侍の城に渡御あり松平三度勤

家忠圖侍に參候して　大神君に謁候此月　獵田

信長四二位に叙次

二月小

四日　遠三兩國大雪降ル積て甚深き事四尺余

十八日　遠州濱松の城經始

三月大

一日　濱松之城之経営を止らせ近日被別田中之城に
御発向候催さるか
七日　大神君を門に陣し給ふ
八日　大神君を門より大井川辺に御陣を移さるか
九日　大神君之城田中の城に発し新ひ城を囲ひ攻
撃しめたまふ前夜鶏鳴ひ時に降り流井與九郎内藤
甚五左衛門厨熊谷小一郎小藤又一郎城壁に忍ひ
寄せ城を窺ひ先登せんと欲城中より伏兵外部
に出し立て守らしむ此伏兵一同に起て先を拒くのみ
河井内藤熊谷小藤ホ桃戦て敵を城中に追入ル　武田

大神君の上聞に達次　命ありて回軍令を守りて扶を
ナるかの条世事ならかの由四人御勘氣を蒙るか　天正九年
高天神の城滿るかの後四人氏に赦免せらるか　御味方之軍勢田中之城外部を被
て競ひ攻む武田ゟ云奮戦て先を拒く松平三殿物家
忠り徳士佐野次助行家族十郎力戦して先鋒を得ら
戸田二郎右衛門厨君次り軍士黒田次郎右衛門厨安形半
兵衛厨岸上勘二郎福井源蔵先登して能く戦ふ
十日　大神君牧野之城に御陣座
十二日　大神君の兵小山之城を攻
此日　謙信上杉輝虎入道　卒去次　四十九歳　京都紀平加州次　と京虎三郎

岡を拿て相戦ふ京勝京虎を殺して遂に立つ 謙信子なり
さ故に北条氏康の男京虎を子と云ふ亦
甥さ京勝を子と次故に二子国を拿ふ
十八日 牧野に城経ふ事なり先に信ぞ 大神君演松に
是を拿ふ

四月大

十七日 三郎信康三州岡崎の城に是を演松に来り城に
登ぞ 大神君に謁ふ事あり
十八日 三郎信康濱松を出て昌倫の城に帰り給ふ

七月小

三日 大神君に台命を奉て松平主殿助家忠遠州
横須賀に城取出に要害を築く殊に暑甚く苦身
なるの事 大神君より御使を下し其一先に労らひ給て
爪を家忠に賜ふ

八月小

七日 牧野の城番西郷孫九郎家貞に代て松平ナ為
ふ事なり先を勤む
八日 大須賀六郎左衛門康高ニ大神に城下岡安
河の辺に軍を発して武田の兵と戦ひ武田の軍勢
利を失て敗北須康高の徒卒多く是を得たり殊
に坂部二十郎廣勝戦功を是に本多平八郎忠勝

石川長門守康通久野三郎左衛門尉ふ家能元を記して
濱松に献次
十一日　大神君及び三郎信康遠州小山に城に御
進発あり。　十二日　大神君ハ濱松遠州遠目
に発して御歸津に時望家に城に見て献元を遮る
石川数正親を追払て数十人を撃捕る
廿日　御味方に軍勢後州田中に辺に刈田に命を
奉て松平主殿助家忠士卒を分て大谷表に指し
遣て一平岩七之助親吉の恒卒刈田に赴き親て鉄
疵を蒙る。家忠徒卒をして元を井呂に送らしむ
廿六日　家忠の軍士刈田の為メ田中表に発次
廿八日　甚雨烈風次　黎明　牧野に城邊に本候として
親七八騎来り寝ひ速に退くのみ御味方に城に
鉄ふに及ぶ次。

九月大

四日　大神君後州より出て牧野に城に收め給ふ牧野
に城書仁連本庄に代て主度助家忠元に勤む
六日　大神君牧野に城より濱松に歸り給ふ三州の諸將
ハ牧野に城に殘り留て城壁を修補して又牧野の城に来ハ
命に依て今城一軍を発次

十一日　大神君圖行に渡御あり
十四日　大神君演松に歸り給ふ
十九日　武田勝頼会稲卒して遠州に出張するの由
其國へ取り
廿七日　三郎信康武田の会を
出御事を守り給ひて濱雲に来り給ふ
廿八日　申ノ刻大地震皆武田の会山を越へ来るの由
牧野城を演松に注をす
晦日　欲大井川を越るの由牧野城を演松に注を渡
元に従て二刻に請将　命を奉て見府て驛に津を
高天神に城を廻て夜半まなく欲の会人窺に城を取て
御味方に囲を成脱す去人の御を源義源の命勝吉元
を撃捕るか其元に勝頼り在判に濃書一通を見れ
勝吉元を取て　大神君に献次
十一月大
二日　武田勝頼小山相良急に津を移すの由注をかれ
給て　大神君及び信康馬体塚に御を発あり請
卒ハ皆米糸に屯次
三日　大神君信康御父子師を帥て横須賀に城を辺
総社山に津し給ふ其会八千余猶請卒ハ久口山下に
津を張るか武田勝頼進て横須賀の城を攻んと欲し

会稽卒して横須賀に起ると云ふ此道（三十）大神君津し給ふ
山下御経ゆるの間　大神君の武威に恐れて柱鎌を小
笠原與八郎好ひ山縣の津代小笠五郎会清厨二子の
軍勢海路を経て横須賀に城辺に至る横須賀の
城は大須賀五郎自然厨康高城主として筧助左衛
等相加へ其御守ゆるか筧進て城中より出張し恒会
を指揮して鉄りしむ小笠原與八郎小菅四郎会東厨
恒卒を進めて矢軍須勝敗津を分つ事七列し
て大神君の御津と入江を沮て津を干時武田の臣
強て津ゆるに信て勝敗鉄りまして会稽引て高天
神に近く大須賀康高の軍士源義源四郎鷲山僧
八郎清井九右衛門厨柘植亦十郎等勝敗り後軍を
追撃て源義柘植二人を縦を得たり　大神君其日
軍功を廃せて源義源四郎に草胴服を賜ふ
四日　敵に付候横須賀迄辺に来り窺ふ
七日　水野藤次郎より荒木摂津守村重信長に致く
事を注進し次　十二日　勝敗高天神に城を近く
十四日　松平三殿勝家忠進て是川の益田に会稽斧すり
之処に武田の先家大井川を渡りまゆるの由其告知を
十七日　敵に会三家鳴田に至て出張次

十九日　歓喜塚に陣を引く田中の城に近く
晦日　武田勝頼去る事大久日会稲妻に甲州に帰る事の由
注をあるに従て　大神君演松に城に御凱旋あり
此日信康演松を出て岡崎の城に帰り給ふ

天正七年己卯

正月大

一日　諸士演松に城に登て　大神君に謁し新正の
賀儀を献す　二日　庚に入り演松の城にて
例のごとく御謡物あり松平主殿物事忠城に出て是望ス

十日　大神君三州吉良に狩し給ふ
十九日　大神君三州吉田より演松に還り給ふ

二月小

九日　大神君命かりて来る十八日より再び演松に
城経始あり事忠を監すべきの御旨を蒙る
十一日　本多作左衛門厨事次り構への事結今日ら
始る事忠を監次

三月大

六日　牧野に城の整衛事忠に命せらる事人を分け
演松に請し留て事結の事を候せし次事忠演松

を発して石川に着く
七日　主殿助家忠牧野城にあり西口孫九郎家貞に
代て牧野城を守るか
十五日　勝頼國安に陣を敵に入　大神君信康と
馬伏塚に陣して兵に對し給ふ
十六日　牧野の城書戸田彩六郎に代て家忠深溝の
城に歸るか　十七日　勝頼國安を去るか
十九日　勝頼大井川を渡て返て故に　大神君濱松に
御凱旋あり
四月大

七日　遠州濱松の城に於て　台德院殿誕生諸士京
賀須干時　大神君命して大井甚三郎（七歳後に大藤
臣利勝と号ス）
をして　台德院殿に附しめ給ふ兵ありて甚三郎日頃
怠り須勤仕して遂に捕伏に臣がるか
十三日　勝頼後州江尾に至て出張せるかに信て來る
十六日　家忠長篠卒して濱松の城に池氣つき旨　大神君
乃命を奉て石川伯耆守　粉正家忠に告るか
十五日　主殿助家忠士卒を携へ濱松に至る後國
の軍勢高天神國安に陣するかの由其聞へあり
十六日　夜に入　大神君馬伏塚に御發向あり三郎信

康之此曉馬伏塚ニ至リ給ふ三列ニ軍勢等各人有の
驛ニ津須
廿七日　三列ニ軍勢進ミ袋井ニ至るか武田ハ云国安
を引退くの由其告あり
廿九日　馬伏塚ニ守将　大神君ニ属ス
今ノ日武田ハ云大井川を渡ミ退くの由注をあるに
大神君演松の城ニ帰り給ふ
十月小栗氏殿ハ軍勢梶原の某海賊を浮海ハ原
の城ニ進ミ武田ハ云小演間宮ホミ船軍ニ勝敗ハ
浮海ハ原に津して気を見るか武田ハ軍勢始利を失
と云ふ　向井伊賀守其子ニ云康勢力強ミして奮戦
姫の間武田ハ云遂ニ利を得たり
八月大
三日　大神君三列岡崎の城ニ渡御あり故ありて三郎信
康と御父子の間御不快なるに依て也信康ハ岡崎の城
を避け同国大演の城ニ閑居しあるに
四日　三郎信康大演の城ニ至岡崎の城ニ来て　大神君
ニ謁し誤ち紀の旨津謝し給ふと云ふ　大神君の御
疑心遂ニ散せるかの間信康其雨を凌て夜中ニ又
大演の城ニ帰り給ふ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

五日　松平主殿助家忠圖書の城に參候して　大神
君に謁し奉る于時　命かりて四弓鉄砲の恒兵衛を
引率して速に西尾の城に馳行彼城を警衛すべき
の御分を奉て家忠則圖書を発して西尾の城にあれ
此日大神君西尾の城に渡御あり
七日　大神君西尾の城より圖書に歸り行に本城に警
衛松平上野介桃原小平左康政北畠に守りハ松平
主殿助家忠松平玄蕃以家清鵜殿八郎三郎　命を
奉て兵を勤む
九日　大神君の命に依て三郎信康三州大濱に仁より
遠州堀江に城に移り給ふ　後ニ又二股ニ移ル　十日　大神君
鵜殿善六郎を御使として家忠を召沼則家忠圖書
の城に參候次其外參州に諸將召に應して群集に
于時　命かりて三郎信康に密通に音問致しへらるる
の由諸將をして各起請文を書しめ給ふ
十二日　大神君圖書の城より濱松の城に屋御本多作
左衛門尉實次をして圖書の城を守らしめ給ふ
十九日　信康に母公　瀧山に御方と号に　関口刑部少輔の女　寄に過ぎ圖本
平左衛門尉兵を差次

九月小

二日　牧野の城整衛の為メ家忠演相に參催を頃日
大神君卿御不例ある
相列小田原に城を北条氏政勢を関東に揚るゝ云
へ其遠に信長の威風を以て請ひ其に属し
大神君と約を期し武田勝頼を撃んと相催候
五日　小条より朝比奈泉右衛門を使として大神君に告
て云く吾勝頼を一豆列に相支ん干時後列に至らく
勝頼り後を襲ひ給へ　大神君其を諾し給ふ
十三日　大神君北条氏政と御和睦あるに来る
十七日其に合として後列表に御働座あるへきの旨

諸將に觸催さるゝ
此日大須賀康高天神の城下三冬に佐々を設け城を
を謀り出して撃んと欲候の間諜を図て城中に告る
其に信て城を遮て軍を城外に発候康高地利に
津して是を持待相戦て大に利を得る徒卒坂部
三十郎廣勝鏡服にして敵に魁を中野に左衛門を撃
捕る其外康高り軍士多り其級を得るり敵に利を失て
城に敗し入る
十一日　三郎信康遠州二股に於て生害し給ふ　干時廿一歳　法名騰雲
院隆岩長越　遠州に住人天野山城守先を介錯候　山城守り力　千子村正

信康之女子郎人赦免有て恙なし　一人小笠原吉部右浦秀政に嫁す一人ハ本多義法守忠政に嫁次

十七日　北条氏政りに合して御味方之軍勢後列に入んかゆゑ是川の澤を発次

十八日　大神君後列に入給ふ諸卒ハ二山に陣ス

十九日　大神君松平甚右衛門家忠牧野右馬允に命して望宮之城を撃しめ給ふ

廿日　大神君田中之赤池に御陣坐

廿五日　勝頼後府に帰る故に大神君を収て井呂に至り給ふ大沢賀五郎兄弟府康高松平周防守康親殿して敵を拒く御味方之軍云馬筏を組て大井川を渡次

晦日　大神君牧野の城に入給ふ

十月大

一日　大神君牧野より濱松之城に帰り給ふ

九日　大神君今川氏真を濱松之城に餐し給ふ

十九日　大神君濱松を御出を発かりて是川の澤に御陣座

廿一日　遠州河上にして大沢賀康高休を設け敵を撃て其級を得る事

廿六日　牧野の城番二連木の云に代て今日家忠濱松に帰ル

十一月小

四日　松平主殿物家忠　大神君の命を奉ぜ井呂り
濟急に佐々を設け狼煙を以て物を期し不意に起
て敵を撃つきの中兼て諫を定らるゝの如く下卒
等爾に近辺に野に火を放て煙を揚ルの間其約相
違次　大神君先を怒り給ひて放火するなの者を
御紀明あるなの事に島居彦太清門厨元忠り怪卒也
則彼者を斬罷せらるゝ

七日　松平主殿物家忠　大神君の鈞命を奉ぜ瀬坂
表に佐々を設る敵家に池東なるの間佐々を発して
急に攻撃ッ敵狼狽して敗走次先を追ひ敵の云五
狩を撃て其先を得たり其外小荷駄十疋追ひ崩して
先を奪ひ揚ル　大神君も切却麿せらるゝ

十一日　大神君濱松を御出馬ゆ川の縁に其御請卒ハ
近辺に邑里に屯ス

十二日　御味方に軍階横須賀に陣を接ス

十五日　大神君濱松の城に至り給ふ主殿物家忠城に先
て　大神君本多百助を上使として主殿物家忠に休暇を
賜ふ其外諸將各暇を賜ふ明曉濱松を発して皆居
城に起く

廿四日　大神君より蒼鷹を主殿助家忠に賜ル　昔武
田より云後別田中に出張すなの中濱松に注をあり
廿五日　歟田中に出張するなの間家忠云を率して濱松
に他參るなへきの旨　命あるなの中天野二郎云濱府康
京圖侍の城を深溝の城に告るなそに依て家忠深
溝を発して此日荒井に驛にあるなり
廿六日　家忠濱松に至着し城に出て　大神君に謁ス
歟高天神の城に移るなの中　此日濱松に注をあり
廿七日　家忠濱松を発し進て見付の後に陣を觀ず
安を退くの中其告かりそに依て家忠云御率して
濱松に歸るなり

十二月大

二日　家忠休暇を賜て深溝の城に歸るなり

天正八年庚辰

正月小

一日　新正を祝し奉んり後ハ法士濱松に城に參賀次
二日　夜に入例に如く濱松の城にして御謡初あり松平
主殿助家忠城に登て着座也
三日　勝頼高天神に城後援として甲斐信濃の一揆を

催し軍を出すの告あるにつく孫四信忠云御卒して
尾州清洲に到る
四日　横須賀城鎮衛として水野監物同姓惣云米尉兄
に赴く　五日　大神君従四位上に叙し給ふ
廿四日　大神君ニ州西尾に移し給ふ
廿七日　大神君岡崎の城に渡御あり
二月大
十日　大神君後州表に御発ニ生酒井忠次ニ生家
忠に告る
三月小

十三日　東る十六日高天神取出し為メ家忠士卒を携
濱松に参津すべきのる　鈞命あるの生酒井忠次吉
田ニ城ニ生深溝に告る
十六日　家忠濱松の城に参ニ出し城に入れて　大神君
に謁次　此日　大神君濱松を御出馬
此日高天神ニ城云天王り馬場に出張次大須賀康高
中村ニ砦ニ生云御発して相鉄に康高り従士久世三
四郎坂部三十郎氏家今次郎近藤氏助菅沼云蔵
鷲山傳八郎進ニ捨を合せ奮鉄に甚家康高り従士
戦功の者多し本多平八郎忠勝り軍士内山忠三郎日

並小左衛門厨先鋒に進て陰を合せ合戦次忠勝り
軍勝競ひ至て忠に攻撃遂に的場曲輪に柵を破ル
十八日　高天神を城を攻給んかなに砦を大坂に築き
給ふ　命を奉て家忠大坂を発給
廿日　大坂の砦を修次
廿五日　大坂の砦修築いまし成次又　命して中村孔
出し要害を築かし給ふ
廿八日　中村取出し要害成る
廿九日　大坂中村両城を間に取出の要害を築かしめ給ふ
閏三月大

九日　大神君濱松に城に至り給ふ
廿四日　武田勝頼師を帥て一豆列表に出張次
晦日　来月五日　大神君後列表に御働座し三列の
諸将に觸促する
四月小
十六日　家忠牧野の城警衛に為メ今日濱松に至ス
十八日　牧野に城番西帰　源九郎家員に代て家忠
城を守る
廿七日　三列に軍勝等池田の驛ニ陣ス
乙月大

一日　大神君足川の驛に御津座
二日　大神君云牧野に津次遠州の云ハ井呂に屯ス
三日　御味方に諸勢田中に城を攻む此年依田右衛門佐
田中の城に移り居て其ハ守りか
四日　御味方に軍勢遠目に到り八幡山に津次
五日　怪卒をして田中に城を負て麦を悉く薙して
大神君云を收て足り給ふ石川伯耆守数正殿を干
時警家に城に至る胡比家後河内に軍勢等不定に出て
大神君に後軍を襲ひ撃て鎗を石川伯耆守数正河
井河内守重忠松平周防守康親牧野右馬允康如平

岩七之助親吉内藤源次右衛門尉長鈴木紀二郎小栗
等追し合て合戦を松平左近衛吏直家横合に驅て
頻に競ひ戦ふ敵忽に敗北を御味方に軍勢利に乗て
兵を追撃に次斗浦云部少浦向井伊賀守長谷川左近
右吏次藤左門石原丈郎作天野角右衛門尉櫻井云
康如胡比家方云藤尉同姓年人正矢部源二郎菴
原傳内等ハ始八十余人を撃て各も其ハ得たり甚
中に三浦云部少浦ハ松平周防守康親の臣岡田竹
右衛門尉之次兵を撃掛る然るに一色に某　大神君
之御赦免を蒙ん事を請ふ　大神君之次の軍功を一色

に譲る事を御推察ありて着し給ふ御門環（火威）之行袖
を給へこれ次に給ふ矢部孫二郎ハ安藤治右衛門厨二次兄
抑撃て首を得たり　大神君甚我切を廃せ給ふ
二十貫文を此次に賜ふ
十七日　牧野の城番戸田新六郎に代て家忠演相に歸ル
六月小
十日　大神君横須賀に馬御出し給ふ家忠謙田に陣ス、
十一日　高天神に對して砦を廉り鼻に猪しめ給ふ家忠
進て廉り鼻に陣次
十二日　廉り鼻取出て要害御繕ふ
十七日　火を高天神に外部に放ふ
十八日　怪卒をして高天神城外に稲を苅しめ
大神君御凱旋あり
七月小
十日　大神君是川に御是餐あり之前に軍勢ハ山口に
屯次　十一日　大神君井呂清に陣して稲を苅
しめ給ふ　十二日　御味方に諸士小山に進て
相戦ひ敵を少々撃捕る家忠り從士能我て此を蒙る
者二人　十三日　酒井左衛門厨忠次先日ゟ
田中に城を囲む石川伯耆守相正君次に代ハ田中の

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

城を出て津を見るに此夜吉田を城に帰る

廿四日　小山表苅田を拒として指無く本多平八郎忠勝り従卒之騎旗を鉄を飛ス

廿五日　大神君の命を奉て家忠小山表に出発ス

廿六日　大神君軍を足川に収給ふ諸将を又足川の驛に帰り集るか

廿七日　大神君濱松に城に帰り入給ふ

八月大

北条氏政師を帥て菅瀬川に出張し武田勝頼と対津に兼て之里氏政　大神君と鞠(ヤシ)して勝頼か津を

前後に是を挟て攻撃んを謀るか

十六日　北条氏政か使小笠原濱松に来て武田勝頼と対津の事を告るか

廿七日　松平沢都太出厨重土口之列野見に於て卒去ス　八十之歳

九月小

十八日　来る廿二日家忠を卒して濱松に参津を つきの旨　大神君の狗命を蒙るか

廿日　大神君御出馬定引に出濱松に是之列に諸将に觸き知らしめ給ふ

十三日　大神君命ありて水野惣兵衛厨忠重に
三州苅屋に城を賜ふ　先ほど先忠重の兄下野守信元苅屋に城をとり天正二年信長の
まめに生害ぬ
高力與左衛門厨清長　後に河内守と号ぬ　に遠州馬伏塚に城
及び蒲田の郷を賜ふ

十月大

十二日　大神君師を帥て濱松の城を御進発あり、
十九日　主殿助家忠及び前に諸將大坂横須賀に陣ス
廿日　大神君の命に依て諸將人夫を山に発せて
柵木を代らしむ。

廿二日　御味方に勢進て高天神の城浪に陣を
大神君命して康の晃中村小笠等に取出に各軍
勢をして守らしめ給ひ高天神に城四方に堅を深
して柵を結りしめ郭外一間に軍士一人を配て堅く
城を囲しめ給ふ
廿四日　高天神城外柵を結の普請加ふ
廿八日　大神君高天神より陣を馬伏塚に移し給ふ

十一月小

十二日　大神君命して構り谷に要害ぬ修せしめ給ふ
此日　大神君高天神に城多勢をして堅く兵を囲

海しめ給ふの由信長に告ケ給ん為メ松平主殿助家忠を
御使として安土之城に赴かし矣給ふ家忠 命を奉て
演松を発して安土に至り信長に謁し御使之 御
旨を述て演松に帰る先に依て信長も皇ゝ天神
を攻る事の接を来る

十二月大

五日 夜に入天神之城外石川伯耆守数正り津営矢
火を熱りと云へとも津中之制法堅ふ故に依て聊も物
忽なし姓次

十日 信長も皇ゝ楮子京都福家平左衛門尉長谷川
藤五郎西尾小左衛門尉四人使として天神に来る
十一日 大神君信長之四使と共に高天神之城を
巡見し給ふ
十二日 大神君信長の四使を伴ひ演松に至り給ふ
て先答て後四使を帰しめ給ふ

天正九年 辛巳

正月小

一日 諸士演松に参候して城に出て 大神君に謁
し新正之賀儀を献次

二日　夜に入演松之城に於て例之如く御謡初なり
諸士参賀次
三月小
十二日　去年十月より此春に至て遠三安国之安芸
之天神之城を囲む元に依て城之形りに後援を繕
物に請ふとい今勝利果る次上列に軍を出沿る天
神之城之等を聞て家居し力尽て必死に迫
る故に今夜戌之刻に及て城門を開て一同に進て
出て寄るに囲を破て脱出ん事を欲して石川長門
守康通り守り囲む所の龍り谷に切て出る寄るに

軍勢価を乱る次津を渡メ元を攻撃城之囲を破る
事を得て寄しるに多勢奮撃めて男城之悉く竜り
谷に敗し今に落重て死亡する者数百人諸之於
囲を破て逃去んと欲して本多平八郎忠勝為長
右衛門尉之忠元を攻撃して附金曲輪に追入る水野
惣之衛門尉君重其子藤十郎勝成父子ならびに曲輪
より二ノ丸に進て攻今る水野の従卒清水次右衛門尉
山本市作先登して死的場曲輪に敵殺く拒て寄る
聊様に干時戸田孫九郎康長（干時十六歳後に丹波守と号）
此曲輪を攻人事を請ふ　大神君元を降し給ふの男

康長進て攻撃城中より火を放ツ戸田二郎太清門厨忠
次同く進て奮ひ戦ひ遂に的場曲輪を攻破るか干時忠
次ハ従士石原孫次郎太原兵部極田十云清厨芳賀清
助小先登して軍功を尽す 芳賀清助石原孫次郎安人を大林君御前に召て其功を褒せ遣御弓及び五十貫の地を加賜せらる 松平主殿助家忠進て戦て多々其緒を得
しかも家忠ハ従士板倉木工太郎門厨忠重先登に多くて
敵の勇気を命ひ戦ひ敵城中に敗し今ハ尤重遂て
其に城中に今遂に兵部撃つ於兵家忠ハ従卒板倉
兵蔵定重を始て精兵五騎戦死次寄手に多勢城に
攻今ハの間拒く事を得て城兵悉く戦ひ死して城遂

小海ハ城将岡部丹波守ハ大久保七郎太清門忠世ハ従
卒本多主水正撃て其首を得る事城兵横田十兵五
郎及び相木の某ハ大須賀六郎左清門厨康高ハ陣に
大久保七郎太郎厨尤世ハ陣の間なりか柵を破て逃れ
去るか高天神に城東海らるか此前に内藤三左衛門
厨信成菅沼次郎太郎厨を召して大神君命有
て曰汝等二人國安に住て陣にして高天神に城海
らは撃滅らるかゝの城兵等必次国安に敗し来ん
兵を待て撃留むべきの御分我世家に内藤貴沼
国安に住て陣を張るか大神君に命に遷る次

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

敵出安に敗し来るが内蔵菅沼先を悉く撃揚る
今日高木縁に城にして御味方に軍勢撃揚る深
其凡七百三十余級信長り援助に部将佐々内蔵助
成政野々村三十余先を得して安土に帰る

百三十八　鈴木喜二郎
十五　鈴木越中守
十八　小野図松
七ツ　本多作左衛門
六ツ　内藤三左衛門
　　菅沼次郎左衛門

五ツ　三宅宗左衛門
廿一　本多彦四郎
七ツ　戸田三郎左衛門
五ツ　本多庄左衛門
四十二　酒井左衛門尉
十六　石川長門守
百七十七　大次賀五郎左衛門
四十　石川伯耆守
十　松平上野介
二十二　本多平八郎

六ツ
六十四
四十一
十九
一ツ
三ツ
一ツ
一ツ
二ツ
三ツ

上村庄右衛門
大久保七郎右衛門
榊原小平太
鳥居彦右衛門
松平玄蕃
久野三郎左衛門
牧野菅八郎
岩瀬清助
近藤平右衛門
鳥居俄左衛門

此内後河先方精兵之首級取留
圖部丹波守三浦右近衛門佐前守角石和泉守胡比
家源六郎近藤兵衛清井加兵衛清井彦右衛門
部常刀松尾義棟守谷卿源右武彦刑部丞十六人
彦三郎神應但馬守安西平右衛門安西八郎兵衛
三浦雅楽助

栗田ヶ従兵信州之士

栗田刑部丞栗田彦兵衛清原八郎第二人勝股主税助
梯木庄左衛門山上備後守和根川雅楽助

大戸ヶ従兵

大戸丹後守浦野太湊門江戸太馬允
樵田ノ従云
土橋大郎云湊福嶋本目助
与田能登守ノ従云
与田義法守与田木工左湊門与田武云湊太平原川
三蔵江戸加助
都合首数七百三十余
廿三日 昨夜高天神ニ城溺ルの時城中ニ籠ルの
家の云数百人撃掛らるくしとも今日実検ニ及
て城将ハ首不足ナリ其外撃溺ルの城云ホ
近邊ニ山林ニ隠ル人ノ今ハ其間ヘカリ信ニ諸将ニ
命して其を探リ求メしめ給ふ本卒等ハ数軍ニ
出して其外撃掛ルと云ふ吏士乃其は行ハ
廿四日 大神君高天神ニ演ル御城ノ御親旋ナリ
去年ニ高天神ニ城を囲む諸将ハ百々軍
功を鷹せ給ふ各休暇を賜ふ居城ニ帰ルか
六月大
廿八日 大神君演ル城御進発ナリて貝府ニ驛ニ
津し給ふ
七月小

一日 松平与殿物家忠 命を奉て 桐良に無紙発に
三日 桐良の取出紙 候せし 免給ふ
此月 里武田勝頼軍別並濟に城を築て 新府中
と号次
九月大
十五日 演松の城経営に依て 家忠をうたに 家忠演
松に参候して 城に登て 大神君に謁を
十月小
十四日 演松と城経営ならし
十一月小

十五日 大神君馬体場に 狩し給ふ
十七日 牧野の城に 警衛 西尾弥九郎 家員に代て
松平与殿物 家忠 其を勤む
十八日 信長 無紙 後甲に出んかな 西尾小左衛門を
出し 粮を束條に入らす
此月 奥平九八郎 千時十五歳 奥平信昌カ嫡子 大神君の御前にて
え服に御諱の字を 洋文して 家昌と号に 御太刀
守家を 家昌に賜ル
此年 大神君の御妹を以て 松平玄蕃頭 家清に
嫁せし 免給ふ

此年大久保五郎左衛門厨忠俊卒去 八十三歳

今年渡邊治之助先 をして足怪所よ[illegible]

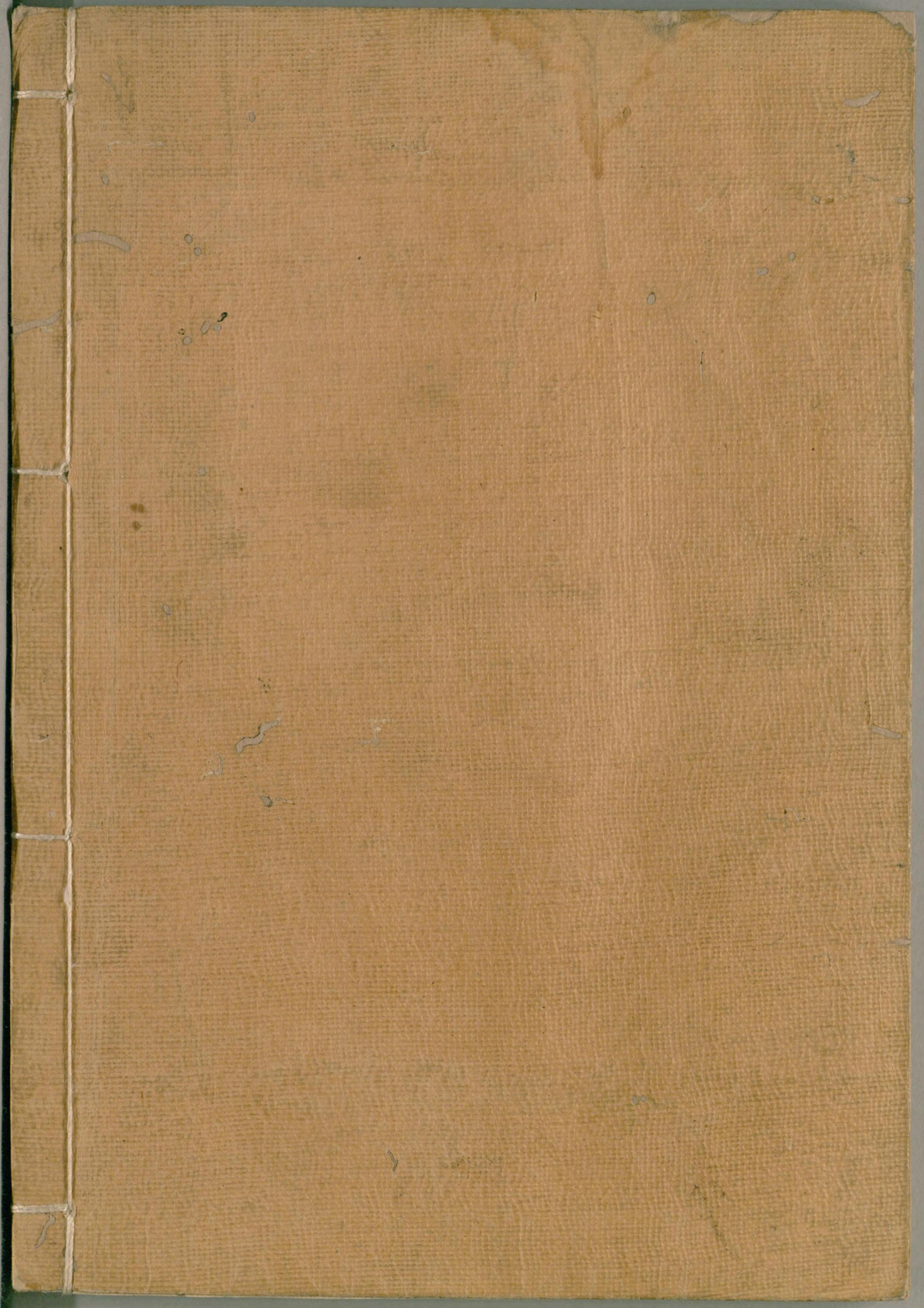
殆文

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用